

日本音楽学会

東日本支部通信 第47号特別号

MSJ East Japan Chapter Newsletter No.47 Special Issue

特別研究会報告

特別研究会（主催：科学研究費補助金（「同時代性」の探究：思想史・芸術学・文化ポリティクスからの複合的アプローチ））

日時：2017年11月18日（土）10：30～17：40 シンポジウム、18：00～演奏会

場所：東京大学 駒場キャンパス 18号館ホール、およびコミュニケーション・プラザ北館（音楽実習室）

内容：【尹伊桑 生誕100年記念シンポジウム—尹伊桑の「同時代」？】（18号館ホール）

1. 徐京植（作家・東京経済大学教授）：「尹伊桑と同時代」
2. 長木誠司（東京大学）：「尹伊桑にとっての日本とドイツ」
3. 小野光子（武満徹研究）：「尹伊桑と武満徹、および日本の作曲家」
4. 李京粉（ソウル大学校）：「尹伊桑とアジア—尹伊桑の音楽世界におけるアジアの意味」
5. 金成玟（北海道大学）：「検閲から考える尹伊桑と韓国」
6. 沼野雄司（桐朋学園大学）：「1980年代以降の尹伊桑作品再検討—「退行」かポストモダニズムか、あるいは？—

7. 福中冬子（東京藝術大学）：「音楽史はなにゆえ尹伊桑を必要としたか？」

司会：長木誠司

【開催趣旨】（長木誠司）

韓国、日本、ドイツで学び、ベルリンでは、松下功、三輪眞弘、細川俊夫をはじめとする多くの若い日本人作曲家を教えた尹伊桑は、戦後前衛の創作のなかで東洋・西洋の関係を問い続けた作曲家である。

1967年、北朝鮮のスパイ容疑でベルリンでKCIAに拉致され、ソウルで死刑判決まで受けた尹を救出したのは、国際的な世論であったが、その後晩年に到るまで、彼は祖国に帰ることはなく、西ドイツ、そしてベルリンを第2の故郷として活動を続けた。しかし、その思いが常に祖国へと向いていたことは疑い得ない。洋の東西を、そして朝鮮半島の南北をまたいだ彼の評価は、いまだに揺れ動いている。

生誕100年を迎えた尹伊桑について、彼が受け容れられた時代はあったのか、それは果たしていつどこなのか、彼にとって「同時代」とは何だったのか、果たしてそれはあったのかということも、もう一度問うてみる。同時代性のなかの非同時代性、あるいはアナクロニズムというものが新たな角度から歴史記述において見直されている現在、そうした視点で尹の創作や創作史を再検討することは、朝鮮半島における緊張関係という現状を越えて必要だと思われる。（以下、敬称略）

シンポジウムは、まず尹伊桑と親交のあった作家で東京経済大学教授の徐京植に「尹伊桑と同時代」というタイトルで招聘講演を行ってもらい、それに続いて

長木（東京大学）が「尹伊桑にとっての日本とドイツ」というタイトルで、日本およびドイツ期における尹の学習・創作・教授活動を、反歴史性の観点を交えながら再検討する（以上、午前中）。

午後は武満研究者の小野光子による「尹伊桑と武満徹、および日本の作曲家」という発表で、戦後日本の作曲家と尹伊桑の相互関係が資料を駆使して行われ、続いて韓国のソウル大学校教授である李京粉による「尹伊桑とアジア——尹伊桑の音楽世界におけるアジアの意味」というタイトルでの、尹を広くアジアのなかで捉え直す視点が導入される（韓国語、通訳あり）。

北海道大学の金成政は、「検閲から考える尹伊桑と韓国」というタイトルで、かつて北朝鮮のスパイ活動の嫌疑がかけられた尹伊桑が、韓国でどのような検閲を受けてきたかということが発表され、メディア的・政治的な観点から尹の過去・現在が捉え直される。

桐朋学園大学の沼野雄司は、「1980年代以降の尹作品再検討 — 「退行」かポストモダニズムか、あるいは？—」というタイトルで、尹の創作における非時代性ないし反時代性の系譜をたどる。東京藝術大学の福中冬子は、「音楽史はなにゆえ尹伊桑を必要としたか？」という挑発的なタイトルで、戦後の創作史・音楽史記述の脈絡が、なにゆえ尹のような作曲家を歴史の舞台に上げる必要性があったのかということ、歴史記述の必然性の視点から検討する。

個別発表の内容を踏まえ、会場からの意見を含めた1時間ほどの共同討議により、尹伊桑の現在、あるいは可能的同時代性が総合的な観点から再検討されたあと、18時から会場をキャンパス内の音楽実習室に変えて、尹伊桑の実作を聴く時間が設けられる。

演奏会「尹伊桑の室内楽」では、尹の作風を代表するような4作品、《ピリ Piri》（1971）、《空間 I Espace I》（1992）、《インタールーディウム A Interludium A》（1982）、《東西—ミニチュール OstWest—Miniaturen》（1994）がオーボエ、チェロ、ピアノを交えて演奏され、シンポジウムでの論の展開を実際に各自の耳で確認する時間としたい。若手の演奏家たちによる演奏である。——演奏者：石井智章（ob）／山根風仁（vc）／秋山友貴（pf）

なお、この催しは「科学研究費補助金：研究課題／

領域番号／16H03358 研究種目／基盤研究(B)「同時代性」の探究：思想史・芸術学・文化ポリティクスからの複合的アプローチ」によって主催され、日本音楽学会東日本支部のほか、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ピアノ委員会、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部オルガン委員会、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学表象文化論の共催、東大駒場友の会の協賛となる。

【傍聴記】（池原 舞）

今年生誕100年を迎えた尹伊桑（1917-1995）は、日本にも多くの弟子がおり、戦後の前衛音楽界において重要な存在であることは十分に認識されているにもかかわらず、北朝鮮のスパイ容疑による拉致事件を体験した亡命作曲家という位置付けから脱していない。そんな尹への再評価の試みとして彼の素顔に多角的な視点で迫ろうとした本企画は、国境を越えた7人のパネリストによる講演に室内楽演奏会を加えたシンポジウムで、ほぼ丸一日かけて行われた希少価値の高い大イベントであった。

最初に、尹と親交のあった徐京植氏より「尹伊桑と同時代」のタイトルで招聘講演が行われた。徐氏は、東ベルリン事件における尹の体験-屈辱的な拷問とそこから生還-について、当時の状況をふまえながら回想した。1. リンザーとの対話『傷ついた龍』でも象徴的に語られる《チェロ協奏曲》終盤での音楽的上昇の挫折に尹の傷が重ねられ、音に宿るヒューマニズムを考える場となった。

長木誠司氏による「尹伊桑にとっての日本とドイツ」は、尹が受け入れられた同時代とは一体何であったのかを問うもの。1960年のドナウエッセンゲン音楽祭で、日本の伝統音楽に音列技法を融合させた松平頼則の《3つのオーケストラのための「舞楽組曲」》が対比の乏しさを理由に不評を買った一方で、類似の試みとなる尹の《レアク》は6年後に成功した事例を挙げ、東西の共生が一枚岩ではないことを示唆。fremdなもの扱い、西洋的な表現主義との近親性、アナクロニズムの内包など多面的に検討された。

小野光子氏による「尹伊桑と武満徹、および日本の

作曲家」では、直接的・間接的に日本の作曲家に貢献した尹の功績が確認された。なかでもとくに武満との関わりに焦点が当てられ、尹と武満の相似点は「永遠性と結びついた」、「はじまりも終わりもない音楽」であることが、言語表現として現れ出た思想と作品の音響体の両面から具体的に示された。

ソウル大学より招かれた李京粉氏の「尹伊桑とアジア-尹伊桑の音楽世界におけるアジアの意味」は、同時通訳付きで行われた。尹について語られるとき、西洋では「韓国」よりも「アジア」という上位概念のうちに理解されてきたという側面、尹にとってのアジア的なものは中国や韓国の宮廷音楽でありそこに日本が同じ意味では含まれない点、日本人にとっての「アジア」に自国が含まれるか否かといった問題などから、尹をめぐる「アジア」の意味が再考された。

金成政の「検閲から考える尹伊桑と韓国」は、東ベルリン事件は朴正熙政権による冤罪だったと 2006 年に公表されたにもかかわらず、朴権恵政権に交代後の「文化・芸術界ブラックリスト」に、没後 22 年も経った尹の名が含まれているという問題を扱ったもの。金氏は、この検閲が音楽に対してではなく記号としての「尹」に向けられていると指摘。韓国社会における尹評価への変遷を丹念に振り返り、禁止と排除（1967-87 年）、解禁と分裂（1988-2007 年）、隠蔽と歪曲（2008-16 年）、承認と否認（2017 年-）と分析した。

沼野雄司氏の「1980 年代以降の伊作品再検討-「退行」かポストモダニズムか、あるいは?-」は、しばしば「新ロマン主義」と評される 80 年代以降の尹作品に対し、新たに批評的な言語を与える試み。政治的背景から社会主義リアリズムとも密接している点を挙げ、北朝鮮社会へのシンパシーを「ノスタルジア」と捉えることを提案。社会学者のベイカーとケネディーによる「リアルなノスタルジア」/「模倣されたノスタルジア」/「集団的ノスタルジア」の 3 分類のうち、後者 2 つの要素が強かったのではないかと論じた。

福中冬子氏の「音楽史はなにゆえ尹伊桑を必要としたか?」は、音楽史記述としての問題提起であった。生まれた朝鮮・育ったドイツは尹自身に「埋め込まれたもの」であり「特定の遺伝子が成せる業」といった

書き方は、戦後の前衛音楽にしっかり身を置いた作曲家に都合よく「朝鮮」を放り込むことになる指摘。今や音楽史は、ヨーロッパ/非ヨーロッパの二項対立から脱し、「世界音楽」として記述されつつあるのだから、そうした視座が必要であるとの主張だった。

パネリスト全員の講演が終わったあとの共同討議では、大小様々な質疑応答および意見交換の場となったが、とりわけ興味深かったのは、以下の話題である。「ノスタルジアは、やはりリアルなノスタルジアなのではないか」。「ドイツという内部分裂を起こした国だからこそ、単一体では語れない、矛盾を孕んだような尹が、当時の歴史記述に合致したのではないか」。「ドイツだけれどもヨーロッパといった視点が、60 年代シーンにあったのではないか」。

議論は極めて有意義であったが同時に、尹という作曲家を語る際の語り口自体が、どうしても政治的な悲劇の周りをぐるぐる回ってしまうということを実感させられた。ここからさらに議論を成熟させるとしたなら、歴史的な脈から作曲家像を一度完全に切り離して、純粋に彼の音楽のみと向き合う必要があるのではないか。

その意味で、討議のあとに続けて企画された演奏会「尹伊桑の室内楽」は、何時間も言語とともに考察した内容を今度は音で迎える稀有な体験となり、ここまでシンポジウム全体が完結をみたといえよう。演奏曲目は、《ピリ》（1971）、《インタールーディウム》（1982）、《東西-ミニアチュール》（1994）、《空間 I》（1992）。石井智章氏の百面相のごとく表現豊かなオーボエ、山根風仁氏の円く柔かく解き放たれたチェロ、秋山友貴氏の透き通り煌きに満ちたピアノによって織り成された尹の世界は、何か一つのものが別のものへ寄り添う音現象として理解され得るように思われた。

日本音楽学会東日本支部通信 第47号特別号

2017年12月14日発行

発行：日本音楽学会東日本支部

<http://www.musicology-japan.org/east/>

日本音楽学会東日本支部事務局

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋3丁目3番地3号生光ビル303

TEL&FAX：03-3288-5616

E-Mail：higashi@musicology-japan.org